

ポーランド映画『パプーシャの黒い瞳』を観て



先日岩波ホールで『パプーシャの黒い瞳』を観た。珍しく、モノクロで、ジプシー音楽の流れる、哀切さが漂う映画だった。墨絵のような映像が映す世界は静かで、焚火の灯りが美しいが、厳しい自然でもあった。この映画はロマ語とポーランド語の二か国語で話されているとのことだったが、私にはその言語を全く知らない上、音を聞いても区別がつかないので、その違いが分からなかった。

主人公のパプーシャは実在のポーランド系ロマ族(ジプシー)の Bronisława Wajs (1908-1987) をモデルに描かれている。彼女は 20 世紀初頭から、詩人、歌手として生きた女性である。

<花嫁のパプーシャ>ヨヴィタ・ブドニク 私はロマ族については、フランス、ロシアの旅行の時に、行商まがいの、物乞いとしての姿しか見たことはなく、流浪の民、熱情的な物悲しい音楽が民族音楽としてヨーロッパに影響を与えたという程度の理解しかなかった。今回、非常に興味深く観た。

パプーシャの誕生の場面が悲しい。一人の貧しげな少女が大きなおなかを抱えて、人形店のフランス人形に見とれている。手に取ることなど諦めて、「お人形(パプーシャ)」とつぶやき、とぼとぼ帰路につく道で産気づく。「ママ、ママ」と叫びながら森の中で出産し、生まれた子供をパプーシャと愛称で呼ぶ。誕生に際し、産婆を務めた老女が「そんな名前と呼ぶと呪われる」と断言する。舞台は、森、主人公は、貧困、若年出産、迷信などが取り囲む世界に生きる少女である。

パプーシャはポーランドの大地を家族、親族が一団となって家財道具一切を馬車に積んで、湖のほとりの森の中で暮らし、また、移動するというロマ族の少女だった。ロマ族は家畜は飼っておらず、移動する民族なので、元は狩猟民族だったノマド(遊牧民)なのであろうか。ロマ族だけで団結し、固有の伝統を保ち、他からの支配を嫌う、ある意味で誇り高い民族であるが、定住しないので生産が出来ず、貧しい。また因習に縛られ、教育や、文字を持つことは民族の秘密が漏れることだと信じている。年長者、男たちに乱暴に扱われ、その日暮らしてあっても、美しい自然と澄んだ大気の中でパプーシャは好奇心、冒険心を持った勇氣ある少女に育っていく。鶏を売ってお金を稼ぐ時、パプーシャは黒板に書かれた奇妙な小さい形が文字であり、意味を表すことを知るのである。そして、役にも立たないと罵られながらも、秘かに文字を習い始める。

このような環境の中でパプーシャは 10 代で、親族の年長者のハープ弾きの妻とされる。夫は彼女を熱愛しているが、彼女には喜びではなかった。心を通わせられる人はいなかった。孤独の中で思いを口ずさんでいる時、その言葉を詩として受け止めた一人の寄留のポーランド人の詩人がいた。彼はパプーシャを、素晴らしい言葉を紡ぐ詩人だと言って評価する。彼女の詩からは、大自然に身をゆだねて生きる、ロマ族の喜びが風のように寄せてくる。彼女は私の瞳は黒いが、あなたの瞳は緑色。同じように見えるのかしらと尋ね、喜びに震える。彼に勧められ、詩を書き留め、彼に渡した。

長年、ロマ族は、ユダヤ人と同様、迫害され続け、戦争でも無惨に、多くの知人、親族を失うが、戦後に、ロマ族は定住計画で居住地を与えられ、自然を離れ、町で生活するようになった。しかし相変わらず貧しい。さらに彼女の詩がその詩人によって雑誌に発表されたのは、想像もしていないことだった。今度は、民族の秘密を洩らした罪でロマ族からも排斥され、追放されてしまう。彼女は呪いを受けたと信じ込み、精神を病む。夫も死に、孤独、貧困の中で、晩年を過ごした。自分の詩に曲が付けられ、大舞台で歌われても、悲しいだけだった。パプーシャはロマ族の中で、男の添え物、付随品として、物言わぬ人形として生きている世界から、声を出した最初の女性であったが、代償も大きかった。マララ・ユスフザイさんを思い出す。



Bronisława Wajs